オホーツクの自然

石川俊夫

一月五日に放映（ＮＨＫ）された「オホーツクの四季」は、自然の美しさと厳しさに深くひきつけられた、層雲峡の小学校の先生が八年間にわたって毎年季節ごとに撮映・編集したものであったが、オホーツクの自然はそれほどの苦労に値するものと思われる。とくに、氷原にのぼる朝日の輝きが圧巻で、流氷の動く青黒い海、白鳥、氷上から飛びたつ鷲などもすばらしかった。オホーツクの美しさは夏のみでなく、むしろ、冬こそ他地域にみられない特徴と魅力がある。

初めて知床半島を訪れたのは昭和十一年で知床硫黄山が活動し、とけた硫黄を二十万トンも噴出した世界的にも珍しい現象のみられたときであった。千島を思いだすような海に迫る若い火山、海蝕によって削られ、高い絶壁の岩崖がつづく海岸、その峻峻のゆえに外敵が近づきがたい海鳥のユートピア。

昭和二十八年にはサロマ、能取、網走湖と網走周辺の湖沼群を初めて一巡した。浅い海域の隆起、陸化によって生成した海跡湖は低平な段丘、丘陵に囲まれ、海と連なるがごとく茫洋たる景観は、火山地域とはまったく対照的に静かなやわらぎをあたえる異質の特徴をもっていた。

オホーツクの旅の妙味は、犬飼先生が特徴なきを特徴として高く評価した北オホーツク道立公園にあるのかもしれない。直線的な海岸線、砂丘のある砂浜、海跡湖をいだく低湿地、平坦な海成段丘と高原状丘陵の配列する単調な景観の連続は、冬とともに一層荒寥、寂莫の境地になる。

昭和四十一年に、宗谷岬より雄武にいたる海岸を歩いたが、アイスランド西北部のバス旅行十二時間が、特別なハイライトもないのに、単調な自然の中にあきずに浸りえた楽しいものであったことを思いだし、豊富な観光旅行の極に探り求められる自然は、意外にもこのようなところにあるのかもしれないと思うのである。（会長）